

## 総合科目からのメッセージ

岡屋 昭雄

### 1. はじめに

「子供の生活と文化」という主題で総合科目を実施するようになってから3年が経過した。1年目に講義を開講するためには10数回の会合を持ち、十分な検討を重ねたのである。以下、その時の結論を项目的に挙げてみよう。

- 1) 子供を方法として把握し、現代に生きる若者の生き方を活性化する講義としたい。子供を捉える観点を明確にしつつ、人間そのものの生き方を真摯に考える材料を与えることに中心を据えたい。
- 2) 毎月「子供の生活と文化」についての研究会を持ち、その研究会の結果・成果を基にして講義を実施する。
- 3) この講義を成功させるために、各講義の内容を担当教官が相互に検討し、批判し合い学生が、大学で学んだ意味が明確になるように考慮したい。そのためには各講義ごとに学生の反応を正確に調査しながら、講義を質の高いものにした。
- 4) 各講義担当間のつながりをつけるためにコーディネーターが、連絡・調整する。
- 5) 講義の結果を著書に纏める。

ところで、昭和63年7月に出された「国立大学協会・教養課程に関する特別委員会 報告」は多くの示唆に富む提言がなされている。

一般教育の内容について以下のように述べる。

#### 1. 基礎的能力の育成 — 「共通基礎」 —

「共通基礎」(コモン・ベイシックス)に属する授業科目としては、従来の外国語科目および保健体育科目のほかに、論述作文、科学論文購読、情報処理などが考えられるが、とくに大学教育を受けるにふさわし

いりテラシーとしての読解力、思考力、表現力などの基礎的学習能力の養成と向上のために、初年次に少人数教育として少なくとも、半年間（（大学によって可能であれば1年間）の授業を設けることが強く望まれる。高校入試をも含めて（小学校段階から「名門中学」進学に向けて〈過酷な〉受験勉強が始まっている場合さえあるという。一般に、成績向上のための「塾通い」は通常といわれる）、今後の入試改善に期待される場所であるが、現状における受験勉強の弊害が主な理由の一つとなって、大学入学者の多くは受身の学習に慣らされ、自ら思考し、自発的に“書物を読む”といった経験に乏しく、基礎的学力にも欠けているといわれている今日、大学初年次の教育としてこのことは一層着目を要する。（以下略）

そして、以上の事を達成するために「プレセミナー」「基礎セミナー」のように名称・形式も考えられると述べ、多くの書物や、厳選された文献を次々と読ませ、考えさせ、纏めさせ、発表させるという講義を提言する。そして、「過去の文化的遺産の継承、人格形成および基礎学力の育成」にとって不可欠であるとしつつも、さらには、このような授業科目を大規模に組織化して「コア・カリキュラム」として実施することが肝要である、と提言するのである。

「3. 総合科目について」では（ロ）に以下のような重要な指摘をする。

授業科目は、単一科目のみならず、むしろ2～3分野にまたがる総合科目あるいは、各分野別の総合科目（例、自然分野についていえば、物理的・生物的総合科目の如きもの）をもうけることが望ましいとされている。

また単一科目についても、いわゆる「主題中心的」なあり方が望ましいとされている。

そして、総合科目は、今までの人文・社会・自然の三分野とは独立した授業科目としてもいいと提言する。専門教育との関わりを念頭に置いて「総合科目」を設定することは喫緊の課題ともいえるのではないだろうか。「総合科目」は、とりわけ広領域の研究領域に関わるが故に、今後とも重点的に検討すべきであろう。

以下筆者が関わっている総合科目「子供の生活と文化」について述べることにする。

## 2. 「子供の生活と文化」について

ここでお断りして置きたいことは、筆者が担当したことに限って総括的に述べることとしたい。と言うのは、全体の講義にわたって、全メンバーが集まって検討したわけではないからである。

## (A) 講義の概要

先ず、「1991年度 香川大学一般教育 総合科目ガイドブック」に掲載されている授業日程と講義のあらましを紹介することとする。

## 子どもの生活と文化（文学U）

## 授 業 日 程

テ マ	授業日	担 当 者
オリエンテーション 死と再生・子どものひみつ	4月19日 4月26日 5月10日 5月17日 5月24日	岡屋昭雄 (国語教育学)
対話と人間形成	6月7日 6月14日 6月21日	斉藤和也 (倫理学)
児童文学に表現されたナチズム	6月28日 7月5日	高木文夫 (ドイツ文学)
子育てについて	9月13日	湯川嘉津美 (幼児教育学)
フィールドワーク	9月20日	岡屋ほか
子どもの現在	10月18日 10月25日	岡屋昭雄 (国語教育学)
子どもの言語生活	11月8日	山本茂喜 (国語教育学)
子どもの絵本 (加子裡子の世界)	11月15日 11月22日 11月29日	藤原章司 (保健体育学)
西洋における子どものイメージ	12月6日 12月13日	岡田温司(美学) ※3・4校時の2回
子どものとらえ方 (障害児教育からの視点)	12月20日 1月17日 1月24日 1月31日	湯浅恭正 (障害児教育学)
まとめ(発表会)	2月7日 2月28日 2月6日	岡屋ほか

## 死と再生のドラマ

岡屋 昭雄

ミヒヤエル・エンデの『ネパーエンディングストーリー』をテキストとして、死と再生のドラマを追求したいものと思う。

上述の物語は、『はてしなき物語』と日本語に訳されている。結論から述べると、自分の内面生活が崩壊しそうになっている少年バスチャンが、生命の水、つまり自己を蘇らせてくれる力を求めて、内面への旅を試みる物語なのである。そして、ファンタージュン国が危機に陥っているということは、バスチャン自身の心の危機そのものである。したがって、「幼ごころの君」というのは、バスチャンの魂、彼の心の内面におけるクリエイティブな想像力を人格化したものにほかならないのである。そして、英雄アトレユというのは、バスチャンと同じ年令であることから、彼の無意識世界の英雄的な側面を人格化したものである。つまりバスチャンのポジティブな影の半分であるといっているのである。

ところで、バスチャンは、学校の屋根裏部屋の物置で、稲光りの神秘的な光を受けて、女王幼ごころの君に、「モンデスキント」（月の子）という名まえをつける場面がある。その意味は、名まえをつけるということは、相手を正しく認識すること、つまり相手を正しく認識しつつ、それを自らにとって自覚的に役立つもの、自らのものにすることなのである。したがって、人間が自己自身の本来の魂、創造的な源泉というものと、もう一度新しいかわり方をするを通して再生できるということを示しているのである。

以上のほかにフツール「幸いの竜」でアトレユが冒険するのりものは、私たちの心の内部に於ける自然的、かつ直観的な助けと導きの力ととらえることができ、お守り札のアイリンの裏に彫られている「汝の欲することをなせ」に於ける、本当の意思と自己実現のテーマを示し、さらに、女魔術師サイーデに象徴される心の中のデーモン、アイウオーラおばさんの存在に示される「グレートマザー」の抱き、養い、許すというプラスの側面；また、独立、自立をそこなうというマイナスの側面が描き出されているのである。

もとより、主人公バスチャンは、アトレユの友情によって、生命の水を飲み、人間の世界にかえてくることができるのであるが、そのことは、バスチャンが自己の人格のなかで、自分の半身の影を統合したことであり、また、ファンタージュン国の生き物

や住民はすべてバスチャンが生んだ影と理解できるのである。したがって、影と対決し、自分の人格と統合することは、バスチャンの人格を強め、成長することにつながることは当然であろう。

だからこそ、現実にかえってバスチャンは今までより、自信に充ち、苦難に耐え、さらに、周囲の世界をも変革する力を持つことができたのである。

以上、『はてしなき物語』を用いて「死と再生」のドラマを見ていくこととする。

## 対話と人間形成

齊藤和也

我々は或る意味でことばに非常に敏感である。何気ないことばが思いやりにくいばかりに人を傷つける。そんな経験がことばに対して人を敏感にさせるのである。しかし、こうした敏感さは往々にして対話（面と向かっての会話）からの逃避を生む。我々は、不知不識のうちに、人々の語ることばから必要な情報だけを読み取り、それで事足りれりとするような態度をとってはいないだろうか。いうまでもなく、ことばは情報の伝達のためだけのものではない。対話という一つの出来事を通して人と人との共同の営みを作り出す力をそれは持っている。しかし、マスコミや商業主義が発達して生活スタイルが変化した結果、ことばのもつ情報伝達機能が肥大化した反面、対話的機能はずいぶんと委縮してしまった。

西洋の学問を創始したギリシャの哲学者たちは、対話やことばによる探究を主な研究方法とした。対話は青年を教育する方法とし、或いは学問的に討論を行う方法として用いられた。方法として用いられたというのは、彼らの対話活動の中に、その意図的な使用や一定の律式に則った使用が認められるからである。その形式を簡単に述べると、各人の抱いている諸見解から出発し、それらを吟味にかけた上で、反駁されないものを取り出してくるということになる。現在は価値感が多様化しているといわれるが、各人が抱く価値感が単なる思い込みでしかないことが多い。対話による吟味ということが必要な所以である。授業では、対話の思想の系譜をたどりながら、人間形成における対話の意義について考察する。

## 児童文学に表現されたナチズム

高 木 文 夫

今私たちは「平和な時代」に生きている。だが、その一方で世界を見渡せば「平和でない時代」を過ごしている人々もいる。私たちはそんな人々と無縁に生きているわけではない。日本も40数年前には戦争をしていた。そのために長い間苦勞をしてきたし、今でもその影響は、意識しようがしまいが、生活の隅々にまで及んでいる。また現在、世界のどこかで起きている戦争にも知らず知らずのうちに間接的に関わっていることもあり、将来あらたな戦争に巻き込まれる可能性も皆無とは言えない。戦争に限らず社会が不安定な状態に陥ると、まず最初にそのしわよせが来るのは「社会的な弱者」である、老人、女性、障害者、そしてこどもである。

本講義ではナチズムとこどもたちとの関わりをドイツの児童文学作品『あのころはフリードリヒがいた』（ハンス・ベーター・リヒター、岩波少年文庫）と『父への四つの質問』（ホルスト・ブルガー、偕成社）を中心に述べることにする。前者はユダヤ人のともだちの家族がナチの台頭とともに迫害された過程を描いているが、こどもの目を通したユダヤ人迫害の様子を読むことで戦争を支える要素の一つ「異民族差別」を考える。また後者はナチ時代にこどもだった父親に戦後生まれのこどもが、なぜあのような野蛮な行為が可能だったのか、父親たちはそのときどうしていたかを聞き、父親がそれに答える形式をとっている。こどもの質問と父親の答えを読みながら、戦争の原因、こどもの置かれた状況などを考える。このような視点はナチズムに蹂躪された周囲の諸国のこどもたちの問題を考えさせ、さらに日本の問題点にも目を向かせてくれるが、それについても参考文献を紹介する予定である。

なお、講義までに上記2作品を読んでおくことが望ましい。

## 桃太郎と日本人 — 桃太郎話の心性史 —

湯 川 嘉津美

桃太郎話は、古くから日本人に親しまれてきたお伽話の一つである。しかし、一口に

桃太郎話といっても、そこに描かれる桃太郎像は時代とともに変化してきている。とりわけ、明治に入り桃太郎話が教材として子どもの教科書に登場して以降の変化には著しいものがあった。そこで本講義では、若衆桃太郎から少年桃太郎へ、さらには戦時下における軍神桃太郎話の変遷をたどりながら、日本人が桃太郎に寄せてきた思い、あるいは桃太郎を通してその時代の大人たちが子どもに対して何を与えようとしたのか考えてみたいと思う。

## 子どもの現在

岡屋 昭雄

子どもが子どもらしくなくなってすでに久しい。子どもという時代を闊しないですぐ大人になってしまう、という枠組のなかで私達は、子どもが本来持っている特質をもう一度見直す必要に迫られている。柳田國男『遠野物語』の世界の豊かさ、また柳田が指摘する子どものよさに触れつつ、あわせて宮沢賢治の「風の又三郎」「セロひきのゴーシュ」の子どもを持つ世界の持つ重みと、宮崎駿のビデオ『魔女の宅急便』『となりのトトロ』に見られる現代の子どもとを較究しつつ現状の子どもが生活している状況を中心にまとめてみたい。

## 子どもの言語生活

山本 茂喜

子どものことばはどのように発達していくのか。子どものことばにはどのような特徴があるのか。子どものことばの力を育てるための絵本や教具・テキストにはどのようなものがあるのか。ことば遊びにはどのような種類があり、子どものことばの教育にどのように役立つのか。……等々、子どもの言語生活と教育をめぐる諸々のテーマについて、具体例をもとに考察していきたい。

## 子どもと絵本 — 加古 里子の世界 —

藤 原 章 司

「絵本を題材に、何か話してもらえませんか？」とO先生に共通テストの監督中に依頼され、大先生の頼み故に断わり切れず、とうとう一席ぶつハメに陥ってしまいました。

「絵本」といえば、子どもにとっては『読み聞かせ』が大切である、とよく言われます。我が家でも子ども達（男の子3人）に実行してきました（今なお進行形です）が、だからといって、特に国語の成績が良い、とか、性格がバツグンである、などというような効果は現われてはいません。良い成績を取らせるために本を読んでやってきたわけではありませんから、別に気にするようなことでもありませんが……。

ところで、子ども達って絵本から何を学ぶんでしょうね？ 親の膝に座って本を読んでもらう。それだけでも何かが得られそうですけど、本の中身から得るものって、何なんでしょう。あるいは、本によって、何を学ばせることができるんでしょうか？ それとも、何かを学だせる、学ぶ、なんてことは思っちゃいけないんでしょうか。

親が物語を感情をこめて読む、その行為から得られるもの以上の何か。当然、ある年齢以上が対象となりますが、その『何か』について考えてみたいと思います。

作家としては、加古里子（かこさとし）を選びます。この人の科学絵本には定評があり、愛読している子ども（といっても親が勝手に選んでるんでしょうけど）も多いようです。もちろん、我が家の本棚にもたくさん並んでいます。「科学的」な本（かわ、海、よわい紙・強いかたち他）「ヒトの体」についての本（は・は・はのはなし、かこさとしのたべものえほん全10巻他）などが有名です。

絵本としては、「かこさとちのからだところのえほん（全10巻）」を使います。このシリーズは、「子どもの素朴な疑問と悩みを通して、最も身近な存在である自分自身のからだところについて、子どもの目でみつめていく」ことを目的として書かれています。対象は4歳から小学校低学年で、①わたしがねむり、ねていたとき、②びょうきじまん、やまいくらべ、③なきむしやさん、だいしゅうごう……⑤おとうさんのおっぱい、なぜあるの、⑥いのちとからだのなぞなぞなんだ、といった内容です。

この絵本は、明らかに教育的目的をもったものです。広い意味での健康教育の教材としての価値を持っています。有意義な絵本だと思います。



でも……。絵本に教育的な意味を持たせる、という考え方について、皆さんはどう思いますか。そんな堅苦しい絵本なんて……。でしょうか？ それとも。

実際にシリーズの中の何冊かを紹介しながら、「絵本による教育」について一諸に考えてみましょう。

## 西洋における子どものイメージ

岡田 温 司

ルネサンスから啓蒙主義の時代に至るまで、子どもがいかにイメージされ表現されてきたかを、主に肖像画、風俗画、宗教画など芸術作品の解説を通じて素描する。その際、美術史的・文化史的観点はもちろん、家族観、性関係、教育制度など社会学的な観点も考慮しながらアプローチしたい(スライド使用)。

## 子どものとらえ方 — 障害児教育からの視点 —

湯 浅 恭 正

教師や大人にとって子どもをどうとらえるかは古くから重要な課題であった。しかし、現代の子どもにみられる問題状況を考えると、子どもとは、そう容易に把握しうる存在ではないといえよう。

本講義では、障害児教育の視点から、子ども把握と、その課題を述べる。私たちが障害児・者へ接するとし、彼らの行動の何を、どこから理解すればよいのか、テスト(検査)などで測定できることの少なさに気づかされる。彼らの一見マイナスな行動は何を示しているのか。障害児へのとりくみの中からは、「問題行動を発達への要求としてとらえよう」「否定的なものの中に肯定的なものをとらえよう」といった視点が示されてきている。いくつかのケースに即してこのことの意味をともに考えあっていきたいと思う。そして、重症心身障害児への療育実践のビデオを視聴しつつ、上述のテーマをさらに深めていく予定である。

## (B) 学生の反応

学生への講義の前に次のようなメッセージを伝えた。

## 文学（総合課目）U

5月10日（金曜日）2回目

きょうは、ミヒャエル・エンデの作品を映画化した『ネバーエンディングストーリー』を鑑賞する事をこの前の時間に約束しました。この前の講義の時も言ったようにいま人間が社会のしがらみが多くて息苦しくなっていると言うことを云いました。そのために人間が人間らしく生きることが難しくなっているということにも触れました。とりわけ、今の時代は人間が人間を信じられないのみならず、自分自身をも信じるが出来なくなっていることは皆さんもうすすず感じていることと思います。香川大学に入って嬉しはずなのに心から喜べないものがある人もいるでしょう。大学に入学することはどういう意味があるのきさえ、掴みかねている人もいるはずで。また、自分がいま、何をしたらいいかと言うことが確かである人もそんなに多くはないと思います。

大塚久雄著『この意味喪失の時代をどう生きるか』（キリスト協会出版局）によりますと現代は生きる意味が見えにくい時代だ、と言うわけです。だからと言って、安易に宗教に頼るのも考えものでしょう。他人が自分をどう見ているかが気になって、他人に合わせて毎日を送っている人も多くなった、と言われてます。自分がどう生きたいかが分からないところでは自分のみならず、他人をも傷つけていることになるのです。自分を愛さない人間が人を愛したらどういう結果になるかは自ずと明らかです。自分の可能性にかけ、自分をとことん愛する人間で無ければ、人を愛してはならないでしょう。いくらお金を持っていてもお金は人間を幸福にはしてくれません。信じると言うことは自分を信じるが一番大切なことではないでしょうか。「夢」を持つ、「理想」を持つ事がそんなにいけないことでしょうか。何もかも「ダサイ」「イモイ」ではあまりにも人生が寂しいとは思いませんか。

この前の講義では「死と再生」の意味について語りました。月が替わる、一年が替わる、一週間で替わる、等に見られるように、また、四季の移り変わりは人間を新鮮にしてくれます。私たちは絶えず自己に挑みかかりつつ、自分の生き方を活性化しなければならないのです。主人公バスチャンは母を亡くし歯科技工士の父親は、少しもかまっ

てくれない、あまつさえ、友だちには虐められる自信の無い子供であったわけです。彼の心の中には、アトレユと言う理想的な人物がいたのです。どんな困難をもものともせず、挑戦する人物として描かれております。つまり、バスチアンの心の中に住んでいる人物なのです。無意識の世界（ID, ES）に誰もが持っている人物と書いていいでしょう。EGO, とされるものとの葛藤があることによって人間は成長して行けるのでしょうか。SUPPER-EGOを持つことによって、人間はより高いものを目指して高まって行けるのです。

また、旅をすることの意味についても説明させて頂きましたが、とりあえず、ビデオを見てもらってから、再度考えましょう。

問題意識を持って見て下さい。とかく情報を受身にしか見ない人が多くなったと言われていますが、映像を自分の物として、つまり、対象化して見るようにして欲しい。自分に引き寄せてみるのが肝要ですので、メモを採りながら見ることもいるのではないのでしょうか。また、テーマ、人物に関わった感想、とりわけ、この講義を受講している皆さんがエンデの主張する事を適格に把握してくれるだろうか、と言う不安は残ります。

来週までに感想文を書いてもらいたいと思っていますが、よろしいでしょうか。ビデオからのメッセージを今の自分の問題と関係づけて欲しいものです。だからといって何も難しく捉えないで下さい。自分に正直に書いて下さればよいのですから。

「全き愛は懼れをとり除く」（マタイ伝）

質問のある人は何時でもきて下さい。この「子供の生活と文化」が少しでも皆さんのお役に立てば、この上もない幸せです。

以上が、ビデオを見る前に、筆者が配布したものである。

次に学生の反応を紹介する。

### 「ネバーエンディングストーリーを見て (1)」

教育学部 1年 女子

この映画を見て自分と言うものについて改めて真剣に考えさせられた。エンデの描く“バスチアン”というよりも、そこにぴったり重なる“自分”というものがはっきり浮上したように思う。人間の希望・夢で作られたファンタージェンの国が人間のもっとも恐れる、そして一番醜い姿ともいえる“無”によって滅びて行くと言う過程にはなぜか

しらぐっと引き込まれる物があり、改めて自分の姿を見せつけられるような気がした。

というのも、毎日を平凡に過ごし、幸せになりたいと思いつつも何の努力もしない、そして何時からか、自分に対する自信さえも失っている……。こんな自分をかいまみるような気持ちにさせられた。自分の事ばかり考えて、他人の事は全く無関心、その自分さえ見失っているのだから何とも言いようが無い。とてつもない夢を追っていたのは何時までだったのだろうか。いつから「退屈」と言う言葉を使うようになったのであるか。そんな思いにかられてしまった。先日、偶然にも「スタンドバイミー」と言う映画を見た。「ネバーエンディングストーリー」とは少し違ったものではあるが、とても懐かしい思いに駆られ、「死体を見つけに行く」というとんでもない事を実行し始め、その目標に向かって歩き続ける少年達のファンタージェンがどことなく、いやきっと「ネバーエンディングストーリー」に重なると確信した。そしてこの2本の映画にはとさせられる自分に対しても恥ずかしいと心より反省させられた。

エンデがこの映画でうったえたかったことは子供時代の素晴らしさと言うことのみではなかったはずである。老いることや自分が嫌になること等を含めて夢や希望という人間のみに持っている大きな存在に気が付いて欲しかったのではないだろうか。

## 「ネバエンディングストーリー」を見て (2)

総合科学過程 1年 女子

私がこの映画を見たのは、この授業が2度目だった。最初に見た時は何の事やら分からずにただ、アトレユの冒険が面白いと言うことしか感想がなかった。この映画を見る前に先生がおっしゃった現在が「意味喪失の時代」であること、それに対してエンデがメッセージを発していること、現実と非現実との関係、夢・希望が人間にとって何であるか、夢を持つことと、現実の生活との関連を持たせることによって人間が成長して行けることを視野に入れて今回はこの映画を鑑賞してみた。

この映画の舞台の大部分は非現実の世界であり、人間の夢や希望で想像した世界である。つまり空想世界である。それが即ちファンタージェンである。そこにバスチアンと言う主人公は、肉体は存在しなかったが、心・気持ちを存在させていたのであろう。そして、バスチアンは非現実の世界ではアトレユと言う名前で、勇者として活躍するのである。現実には生きているバスチアンの無意識の世界に存在するのがアトレユである。

あんなに友人に虐められ、家庭においても母親がなくなり、父親も相手にしてくれない孤独な人物として描かれている。したがって、バスチアンとアトレユとは真反対の性格・人物であることに注目しなければならない。だからこそ、現実のバスチアンと非現実のアトレユとの人格的統一が必要になるのである。ここに我々が現実と非現実との葛藤を繰り返しつつ、人間的に飛躍することが出来る機会が生まれることになるのである。ところで、ファンタージェンの世界にも虚無が支配しつつあり、勇者であるアトレユは、旅をしながら、一つ一つの障害を超えて行くことが出来るのである。障害を超えて行くことは、悲しいこと、苦しいことが付きまとう。アトレユの馬が悲しみの沼に沈んで行く場面は、私自身の経験とだぶって見えた。誰もが苦しいこと、悲しいことから逃げてしまうことは良くあることではないか。それを超えなくては人間の成長が無いことは分かっていると看做しても、南のお告げ所で、スフィンクスの門で自信を無くし自信を無くしそうになったこともあった。しかし、その場面では、必ずバスチアンの励ましの言葉があった。「頑張れ」「負けるな」「自信を持って」などと本に向かって叫んでいた。それは無意識ではあるが、バスチアンへのメッセージ・エールでもあったと思う。自分の理想でもあるアトレユに負けて欲しくない、そう思うのは、心の中で自分が負けている現実を無意識に認識していることも重なるのである。しかし、南のお告げ所の魔法の鏡に写ったアトレユがバスチアンであったことで、バスチアンの頭の中はごちゃごちゃになっただろう。

アトレユが虚無に包まれたファンタージェンを救うために女王のいる象牙の塔にやって来る。女王の側にいるバスチアンにアトレユが話しかける場面が印象的であった。女王に名前を付けることを渋っているバスチアンの表情がとても印象深い。完全な拒否はしていないが、なんとなくわくわくしているような、それでいてとても真剣で、一生懸命な表情が、とても子供らしくて良かった。自分の理想・夢の人物といいながら、勇敢で、素晴らしい人間の子供が自分であり、ファンタージェンを救うためには自分が必要だという責任と、現実世界でのギャップにあえいでいる、そんな状況でも、生き生きできるようになったバスチアンは、少し成長したと思う。冒険するアトレユを応援したり、一緒に共感したりすることでバスチアン自身が空虚だった自分の心に夢や希望を取り戻したのではないだろうか。

バスチアンが願い事を唱えることでファンタージェンはもとのようになつたので、め

でたしめでたしで終った訳ではあるが、それはあくまで映画の話であって、現実の私達が生きている社会では、一人ひとりの人間・社会がファンタージェンを復活し、それを存続させることが出来るか、出来ないかは疑問に思う。現存の社会機構では「現実を見て生きて行きなさい」と言う風潮がある。夢・希望を持って生きて行くことは現実の自分との葛藤が無ければ意味を持たない。マニュアル時代といわれ、マニュアルが無いと不安になる人間が多くなっている状況を考えると挫折を繰り返しつつ、なおも希望・夢を持ち続けることが必要ではないか。子供さえ夢や希望を失いかけているという状況は恐い。近ごろの子供は大きな夢を失いつつあると言う。昔は「将来の夢は？」と聞くと「大統領」とか「大きな船の船長さん」だったのが、今では、「安定したサラリーマン」などとはあまりにもふざけすぎているのではないだろうか。（すこし言い過ぎではあるが）私はやはり、人間は夢・理想を追い求めて行く存在であることが大事であると主張したい。

しかし現在の社会風潮は必ずしも夢や希望を受け入れてくれるほどのゆとりはない。それでも夢や希望を持ち続けるために、私は夢や希望を語り合う空間が出来るようになって欲しい。大人も子供も大いに夢や希望を語り合えるようになるように先ず自分の周りから始めて、社会全体がそうなるように努力したいものである。

夢や希望を抱くと言うことは、時として挫折することもあることは当然としても、それさえも抱くことが出来なくなった人間は本当に寂しい存在だと思う。特に現在の若者達が目的を見失い、何に情熱を燃やしたらいいか、分からない状態ではこれからの社会はどうなるのであろうか、と心配になる。現実の自分と、非現実の理想上とのギャップを解決しながら、新しい自分の創造を目指してこれからは生きてみたい。そのためには自分自身をはっきり把握することが必要であろう。

### 『ネバーエンディングストーリー』を見て (3)

法学部 1年 女子

この映画を何回見ても主人公に共感できるのである。バスチアンみたいに、孤独となって自分の世界だけに閉じ込めているばかりでは現代を生きて行くことは不可能であろう。私もまた、バスチアンと似たところがあることに気づいた。友達を作るのが苦手で、相手が話しかけて来るまで待っているのだから、性格的にバスチアンと同じです。

何しろ、お店に行っても店員さんに話しかけることが出来なかったわけですから。そういう性格ですから、友達と馬鹿騒ぎをすることよりも一人で本を読んでいる方が多かったように思われる。古本屋のおじさんも云っていたように物語を読んでいると、自分が物語の中に登場する主人公になってしまうのである。それは危険なことでもある。私は、主人公が危険な目に合うと、はらはらしてしまい、主人公が危険を脱することが出来ると安心してしまうのである。頭のどこかでは、自分の事ではないからと思いつつ、また一方では、自分も冒険しているような気分になってしまうのである。そして自分も現実の世界でこのような体験が出来るのではないかと胸をわくわくさせるようになる。

しかし、ある日突然「こんな事は将来とも絶対に出来ることではないのだ」と考えるようになってしまった。この時点で、もう以前のように読書をしてさめた目でしか見ることができなくなってしまった。このような気持ちになったことをエンデは“虚無”と言うのであろう。ファンタージェンと言うエンデの理想の世界は人間一人一人の夢や希望の実現することの出来るところであらう。今までの発明・発見だってもとはといえば人間の夢から生まれた物であることは確かなことである。そして生活は便利になったのであるが、人間が作った機械によって人間が不幸になった面もある。人間らしい心を失ったことである。夢や希望を絶えず持ち続けることはしんどい事でもある。今の人間は夢を持つことよりも常に目の利益になるものを追っかけているのである。自分だけのことしか考えられなくなった。他人と関わることを面倒に思うようになった。このような状況が続けば、近い将来人類は滅亡するかも知れない。現実のバスチアンが、影の部分であるアトレユと統一されることによって、バスチアンは今までと違った自分を作り出したことになったのである。理想と現実の葛藤を超越することによってのみ人間は成長することが出来るのであろう。

読書は時間・空間を超えて他者と対話することになるので、もう一度読書を始めたいと考えていることである。

#### 『ネバーエンディングストーリー』を見ての感想 (4)

農学部 1年 女子

この映画は何年か前にも一度見たことがあり、その時は、ストーリーの面白さ重視で、主人公の気持ちといったものはあまり考えずに、ぼんやりとみていた記憶がある。今回、

メモを取りながら、「死と再生」と言う意味について考えながら鑑賞したので、この作品の伝えたいことが少しはわかったような気がします。

誰でも、心の中に自分の理想像というものがあり、とりわけ、自分に自信の無い者にとっては、それがどんどん膜らんでいくものである。主人公のバスチアンは、母を亡くし、父親にはあまり構ってもらえず、そのうえ、友達に虐められるという不幸な環境におり、自信が無い子どもであるが故に自分の内面世界に閉じ込めてしまったのである。彼は絵を描いたり、本を読んだりしたりして、空想の世界に閉じ込めていた。そしてバスチアンは古本屋で見つけた「ネバーエンディングストーリー」の世界に引き込まれてしまうのである。

「ネバーエンディングストーリー」の中に出て来る勇者アトレューはまた子どもである。しかし、どんな困難にも立ちむかっていくことのできる勇気のある人物として描かれている。最後に、女王がバスチアンに夢の中のように名前を呼ぶような場面がある。そのことから、バスチアンの心の中には勇者アトレューという人物が理想像としてあったことが分かる。本の中のファンタージェンと言う美しい国には“無”と言う危険が迫っていて、女王の命も危うい状態である。そして、アトレューは“無”をやっつけると云う任務をためらう事なく引き受ける。こういう所もバスチアンとは正反対の性格であると言うことができる。

アトレューが南のお告げ所に行くときに、スフィンクスの門を通る場面がある。そのスフィンクスはいつも目を閉じているが、そこを通る者の心を見抜く力があり、怖がっている者は殺される結果になる。だから、たとえ武装していても殺されてしまう。アトレューはすぐにそこを通ろうとするが、途中で怖がるようになり、その時バスチアンが登場して「自分を信じろ」とか、「自信を持って」とアトレューに呼びかけている。そのことからおそらくバスチアン自身も自信を持って生きて行きたい、と思っていると読み取ることが出来る。次の場面の真実の姿を写すと言われている魔法の鏡の門では、アトレューの姿がバスチアンの姿となって写り、その時、バスチアンはすごく驚く。そこからもアトレューはバスチアンの無意識の世界に住んでいる人物と把握することが出来る。

また、“無”のために働く召使であるグモルクが出てきて、“無”の事や、ファンタージェンの事を話す。それによるとファンタージェンは人間の空想の世界であり、あらゆる場所や、生き物は人間の希望や夢のかけらで作られている。だからファンタージ



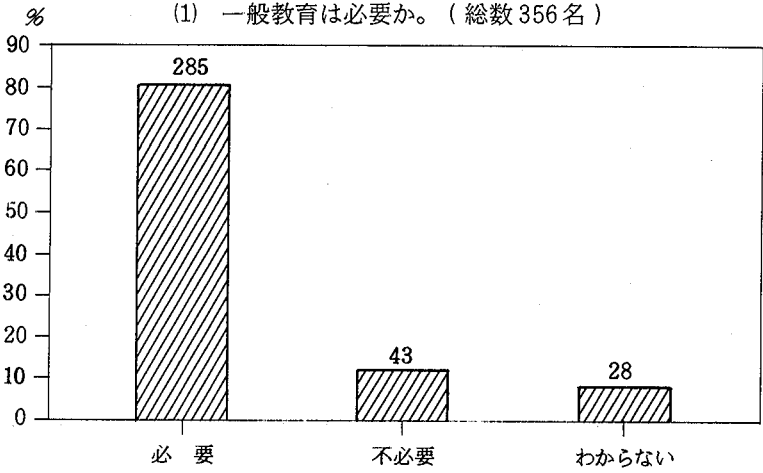
ェンの国は果てしなく膨らんで行き、その国には果てはないと言う。そしてその国を滅ぼそうとしている“無”とは人間の空しさや滅望であり、今、人間は夢や希望を失い始めたためファンタージェンの国は滅びて行くのだと言う。

ついに、アトレューは“無”をやっつけることが出来ずにファンタージェンの終末を迎えることになる。女王のいる象牙の塔だけは消えずに残っている。アトレューは人間の子、つまり、バスチアンを引き寄せるために冒険をしていたのであり、バスチアンは結局自分の物語を読んでいたことが分かる。バスチアンがファンタージェンの国を救うために、女王に名前をつけるのを渋っているのは、やはり、虐められ、構われないと言う嫌な現実から逃避し、自由に生きて行ける空想の世界で暮らしたいとは思ってはいるものの、現実からはなれる勇気が無いという心情からなるのだろう。だが、結局バスチアンは、女王に名前をつけ、彼の夢や、希望から新しいファンタージェンを作り出すことになる。

この映画を見ての感想を、以下に述べる。

現在、人は現実の忙しさに追われ、夢や、希望を失い始めている。空想の世界と現実の世界を行き来することを楽しむはずの子供でさえ、空想の世界を信じなくなり、現実の生活に追われ、大げさに云えば、願い事など叶うはずはない、と思っているはずであり、このまま行けば、この世は感情の無い人たちで一杯となり、自分の事しか考えない人間ばかりが存在する世界になって、いずれは人間の破滅が訪れるだろう。だから、人間は夢や、希望を抱いて、それにすがって生きて行くのではなく、それを達成するために、一生懸命努力して生きる必要がある、と言うことをエンデは伝えたかったのではないのだろうか。

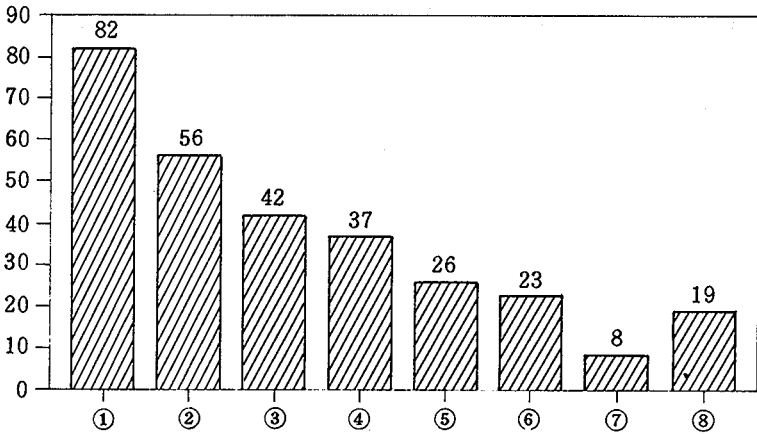
(C) 一般教育について (学生の反応)



(1) 一般教育は必要か。

	必要	不必要	わからない	合計
人数	285	43	28	356
%	80.1%	12.1%	7.9%	100.0%

(2) 必要な理由 (総数 285名)



- 備考 ①は専門の基礎として  
 ②学問のあり方・人間のあり方を求めるために  
 ③自分の専門への興味、または専門周辺へのすそ野への広がりを知るため  
 ④各学部の学生との交流因できたら広場、そこで香川大学で学んだ意味が見え、  
 分るために  
 ⑤専門にこだわらず自由・余裕を持って学ぶために  
 ⑥読書を広い基盤ですすめるために  
 ⑦専門書が読め、文章が書けるように  
 ⑧様々な先生との出会い、分野・専門にこだわらず講義が聞けるために

## (2) 必要な理由

	①専門基礎	②あり方	③専門周辺	④他学部生	⑤こだわらず
人数	82	56	42	37	26
%	28.0%	19.1%	14.3%	12.6%	8.9%

	⑥読書	⑦論文	⑧様々	合計
人数	23	8	19	293
%	7.8%	2.7%	6.5%	100%

(以上、筆者が学生の自由記述を分類させてもらった。若干の分類ミスが存在するかも分からない。さらに一人の学生が数項目にわたって書きたいが、それも一番強調している事を本人の意見として纏めていることを断っておく。)  
 以下、学生のその調査時の意見をのせてみる。

## 一般教育について

## 総合科学課程 2年 男子

私は、一般教育が大事であり、無駄ではないことは分かります。一般教育は他学部の学生と唯一、授業を共有・交流出来る場であることです。その事の意味を考えると今よりも充実した講義になると思われれます。グループで討論してみるとか、他学部の学生と席を変えてみるとかいった工夫も必要ではないでしょうか。特に、高等学校まで、先生が言われることをノートに書き写すだけの授業から、大学では急に自分から学んだと言われてもついていけないものがあるって当然ではないでしょうか。それに自分が何を

したらいいかさえ分らないと言ったところにも原因があります。専門を学ぶための基礎と言ったことも大事にしたい。また、人間として生きて行くための教養と言った側面もあります。

自分勝手な言い方ですが、大学で何を学んだらいいかと言う事の方向づけをしてもらいたいと考えています。そのためには先生と相談できる時間を取って欲しいと思うのですが、誰に相談したらいいのかさえ分らないのが現状です。

いずれにしても一般教育は、人間としての視野を広げたり、学問の面白さ、一つの問題を色々な側面から見て行くような総合科目のような講義がたくさんあって欲しい。

私は、今までないがしろにしていた読書に興味を持てるようになったことがとても嬉しいことです。

一般教育が必要であるか、無いかよりも一つ一つの講義が自分にとって意味があるか無いかによって決まるようにも思うのですが、恐らく一般教育の講義でも意味のあった講義もあるし、意味の無い講義もあったとしか答えようが無いと思います。

## 文学と一般教育について

経済学部 2年 男子

私は授業に、アニメーションのビデオを使って講義を受け、それを基にして考えて行くような授業は初めてであった。そういえば、アニメーションのビデオを見て大学生が考えさせられる問題はたくさんあることに気付いた。こんな所に着目し、授業を進めて行かれる先生はすばらしいと考える。このような授業は斬新で、しかも深い理解が得られると思う。専門教科のみならず、一般教育は社会人として生きて行くのには欠かせないものである。専門だけしか知らないのでは、社会人として通用しないことは当然であろう。

人文系列・社会系列・自然系列・外国語課目・保健体育課目のように分かれてはいるが、学生の希望に沿って講義がとれるようになればいいのではないかと考えている。自分の専門性を考えながら、その背景を支えている分野を幅広く身につけて行けるような、そして、専門性の基礎にある研究の仕方、書く能力、討議する能力等が身に付いて欲しいと考えている。ドイツの大学では、社会人になるための講義もあると言うことを聞いたことがある。大学で学んだことが社会に出て全く通用しないと言うこともよく聞く。

しかし、社会に出て役に立たないような講義であっては、学生は大学に来た意味がない。学問的な視野を持つとともに、人間としても恥ずかしくない教養を身につけたいと言うのが私の願いである。

以上のような意味で一般教育を考えて下さるならば、きっと学生は今よりも真剣に講義に対応すると思います。

### 一般教育の意味について

教育学部 1年 女子

私は、高等学校までの授業で先生が黒板に書くことだけをノートに書き写していました。それが大学に入って急に先生が講義されることをノートに書き取ることは出来ません。講義される先生は高等学校までの教育がどのようにされていたかを考えて講義を組み立てて下さい。最初の期間は板書もして下さい、少しずつノートに書いた方がいいところを指示して下さい、学生が講義の大事なところに気が付くような指導をお願いします。

それと、大学にきた意味が分からない学生も多いことですから、大学でしか学べないことを明確にして欲しいのです。私自身何のために大学にきたのか分からなくなって来ることが良くあります。必ずしも教員になろうとして教育学部に来た訳ではないのでよい悩んでしまいます。

一般教育は必要とは思いますが、講義内容に付いては、学生の質に合わせたものであって欲しいと思います。

### 一般教育について

農学部 1年 男子

講義に対する関心が湧かないと言うのが今の僕の状況である。それならば、一定量の読書を義務づけて、一般教育としてもいいのではないかと思う。大学に入ってから記憶に残るような講義が少ないように思う。この講義では、この様な読書をしておいて欲しいとか、このような事を考えるのだと言う事のオリエンテーションがあったほうがいいのではないか。大学にきてなぜ勉強しなければならないのか、という事を言う学生も多いのだから、そこも考えて学生に勉強することの意味を教えてもらえばいいのではない

か。先生が大学時代どの様に過ごしたのか、の体験談、心に残った書物名も教えて欲しい。

### 一般教育について

法学部 1年 男子

一般教育が必要か、必要でないかと言う議論がよくなされるが、私はその事よりも、一般教育で学生にどんな力が身に付くのかの方を問題にしたい。学生の側から勝手なことを言わせてもらえるならば、教える側も、教わる側もともに真剣に講義に対しては判断できないからである。本来なら、専門的な講義と同様に、一般的な最低限の知識を身につけ、それを生かして人格形成を行い、広い視野を持った学生を作ることにあるのではないか。

学生の現在の実態を考え、講義の内容も考えていいのではないか、また、個人の選択の幅を考慮にいれてもいいのではないか、講義の仕方も一方的に教師がしゃべるのではなく、ビデオ・スライド、時として外に見学に行ってもいいのではないかと考えている。

よって、今後の新制度には大きな期待をしている。

#### (D) 1989年の学生の反応（昨年度の学生）

学生の反応を中心にして述べたい。（学生のアンケートから）

- 障害児教育のビデオを見たことは、大変ためになった。障害児の視野から健常者をとらえ直すことができ、自分づくりと自分こわしの重要性もわかり、さらには、人間が動く、他に働きかけることがとても美しく感じられた。
- 人間の恐怖体験はだれしも持つが、そのことと生きることのつながりがわかってよかった。
- 子どもが「ひみつ」を持つことが自立する、人間となる一歩であることがわかり、「ひみつ」を共有できることの意味もわかる。
- 子どもがことばを習得することがどんな意味を持つのか、まわりの人・環境とのかかわりの大切さもわかった。
- 東ドイツの社会のしくみ、この中心で東ドイツの児童文学の美しさ、子どものとらえ方、その基底に人間の信頼の深さがあることがわかってよかった。

- 「はてしない物語」の主人公バスチアンの心のヒーローがアトレユであることが発見できてよかった。心の世界と現実の自分のあり方、旅することによってよりよい成長を遂げることに、そのためには、冒険をしなければならないことがわかった。
- 多くの先生が講義してくれるので、変化はあった。そして、一つ一つのテーマについてはわかったが、全体のテーマ「子どもの生活と文化」については、もう一つわかりにくい。
- 一つ一つの講義のつながりが見えて来ないので、それがわかるとよい。
- ビデオ・スライドなどの説明があると、わかりやすくおもしろい。
- 評価がどのようにされるのか不安である。
- この講義が学生のどのような力になるのか、そして、どのように発展させたらよいかを明確にしてほしい。
- 最初の講義の時間に宿舎して話し合い、討論するということができたがそれがなくなったので残念である。
- どこか具体的に子どもの現実がわかる所を見学もしてみたかった。

#### 先生方への希望

- 「こんなことさえもわかっていない」と、学生に対してほしくない。こんなことがあると、学生がしらけると思う。
- 確かに、今の学生はおしゃべりをしたり、ねむっていたりして先生方から見れば不まじめと見られますが、それには同情しますが、今、わたしたちがどうしたらよいか、何から始めればよいか教えてほしい。
- 先生方から見れば、そんなつまらないことで悩んでいると思われるでしょうが、その悩みもわかってほしい。
- 自分の第一希望で来た大学ではないので、先生方のいわれる負け犬のような所もあります。そこから早く脱皮したいのです。
- 一般教育での講義が自分のやりたいことと違って単位だけとればよいという考えの人が多。そこをどう考えたらいいのでしょうか。
- 学生にもっときつく叱ってほしい。
- 結論まできちんと教えてもらわないと、現在の学生にはその意味がわからないと思います。
- この大学に入学できてよかったと思えるようになりたい、と思います。

- 文章を書く機会を多くしてほしいと思います。とくに、どのように書いたらよいかも教えてください。
- 先生方と自由に話し合いたいと思うことがあります。こちらからいうのがわるいような気がして、ついおっくうになります。
- 講義に変化がほしいのですが。
- 多人数の講義だと、つい怠けてしまいます。
- 休講の時、早目に掲示してください。
- 講義室の汚れているのが気になります。

### 死と再生について（昨年度のレポートから）

農学部 1年 女子

死とは何か、再生とは何か。死のイメージは色で表わすと暗黒であり、再生とは明るい日の光の色だろう。死はすべてのものの終わりである。再生とは言い換えれば復活・誕生とも言えよのではないだろうか。それは、あらゆる可能性を秘め、命を連想させる。

ミヒャエル＝エンデの「はてしない物語」を読んで感じたことがある。それは、この物語は「死と誕生」について書いてあるのではないかということだ。「死と誕生」は、（この文章の題につかわれている）「死と再生」にもつながるところがあるのではないだろうか。

「はてしない物語」は現実世界と本の中の世界のファンタージェン国とを、1人の男の子、バスチアンを通じて書かれている。バスチアンは太っていておくびょうで、勉強もできず、いじめられっ子だ。いじめっ子から逃げだしてとび込んだ古本屋から一冊の本を盗む。これが「はてしない物語」だ。この本の中では、ファンタージェン国が崩壊の危機におそわれている。この危機を救うためには、幼なごころの君に名前をつけなければならないが、それは人の子でなくてはならないのだ。人の子とは自分の事だと気付いたバスチアンは、ファンタージェン国に行き、その危機を救う。

そしてバスチアンは勇者アトレューと共にファンタージェン国を復活させる旅にでる。途中、現実世界の記憶を失ってゆきながらもバスチアンは現実世界へ帰ってゆく。今までは違う人間として。

ここでは、ファンタージェン国の“死と再生”を通して、バスチアンの“死と再生”



を通して、バスチアンの“死と再生”が描かれている。バスチアンの内面=ファンタージェン国である。バスチアンが違う人間に生まれかわるためには、ファンタージェン国を消す、つまり自分が死ななければならなかったのではないのかと思う。

死というのは、私たちの感覚でいえば心臓が止まって命の灯が消え、地上からその存在がなくなってしまうことだろう。だから、「バスチアンが死ぬ」という表現はおかしいと考えるかもしれない。しかし、私は「死」というものは、あらゆる連続体の終わりであると考えます。

授業中、先生が「一日の終わりと始まりも死と再生だと、とらえることができる」といわれた意味が少しずつわかってきた。このことを考えると、時間の流れすべての一瞬が死と再生のドラマなのだ。

また、死はあらゆる連続体の終わりであると同時に、ある保っていた形体が壊れてしまう瞬間も死だととらえることができると思う。たとえば手にもっていたガラスのコップを落として割ってしまった場合、ガラスのコップは「死んでしまった」のだ。

バスチカンのファンタージェン国での旅は成長の旅だった。その旅で成長するためには、グズでのろまでいじめられっ子のバスチアンに消えてもらわなければならなかったのだ。つまり死だ。死んだから、新しいバスチアンに生まれかわったのだ。もしそうでなかったら、「もと皇帝の国」にバスチアンはずっといたかもしれない。

形あるものは壊れるように、生まれれば死ななくてはならない。また、死ねば再び生まれると私は考える。一日が終わるとまた新しい一日が生まれるように。バスチアンがファンタージェン国から帰ってきたように。だが壊れたコップはいくらくっつけてもそれはもとはもどらない。しかし、仮にその品が想い出のあるものであれば、そのものは私たちの記憶に残り、私たちの記憶の中で再び生き続けると考えることはできないだろうか。亡き人が私たちの心の内に生き続けるように。確かにそのものの存在形態は変わってしまっているが、私たちの何では存在形態の変化にかかわらず、また以前よりも鮮明に生き続けるということはあるまいのだろうか。私はそうあってほしいと思うし、そのようにありたいと思う。

死と再生は表裏一体であり、私たち個人のまた地球全体、宇宙全体のドラマなのだ。

上掲の例でもわかるように、学生のレポートが感想文になっており、研究的な目は育っている。したがって、学生の書くことを云々するためには、書

く以前の指導、つまり、作品を対象化したり研究するための基礎・基本の能力をつけることが求められているのであって、そのためには、作品の意味づけ方価値づけ方を教授することが必要となる。とりわけ、文字Uとして位置づけられているのであるから、討論する力（つまり学問的なレベルで）、論文を読む力、論文らしきものの書く力、以上三つのことを視野に入れた講義が必要であると思われる。

入学試験の小論文の答案を見ても型にはまったものが多く、論文を書く力は大学四年間で身につけることになるが、一般教育に放いても、その基礎的指導は必要であろう。とりわけ、ノートも十分にとれない学生もいることを視野に入れたい。

### 3. おわりに

筆者自身の思い、反省として、一般教育の講義についての内容のありかた・教える教師・学ぶ学生の熱意はともに欠如していることを率直に反省せざるを得ない。講義内容が学生の心と切り結んだ、つまり学生の力となり得ていくすじ道を明確にしたい。筆者自身忙しさにかまけて、講義内容が薄くなっていることがままある。講義の途中に入室したり、退学したりする学生もいる状況である。一般教育から専門教育のかかわりを考え、専門と一般教育のかかわりは確かに頭ではわかるものの、具体的な講義では実行できていない。もちろん、それぞれの一般教育・専門教育の独自性はあるとしても、とりわけ一般教育と専門教育の枠組がはずされる状況にあって真剣に考えたいところである。

「初心忘るべからず」といわれる如く、教師は学生に真剣に対応するのみならず、講義の内容が一般教育の体系性のどこに位置づくのか、何をメッセージとして学生に送るべきか、を真摯に考えたい。

とりわけ総合科目にあっては、テーマの一貫性をはかり、講義とはちがった学際的な科学に裏づけられた方法を学生が身につけるようなものでなければならぬ。そのためには共同研究した成果を講義にかけることは大事となり、授業形態の多様化・多彩化をはからねばならない。

いずれにしても、今回は、筆者が担当している講義を中心に纏めた。その

ために他の考察・纏め，そして他の教官との連続性，この講義が真の総合科目になり得ているかどうか，その講義の成果等については，メンバー全員の討議・討論を閲して別の機会に報告したい。